

夏ソバ品種「なつみ」の熊本県阿蘇地域における播種期および施肥量の検討

○林田裕樹・安武智臣¹⁾

(熊本農研セ高原・¹⁾広報課)

【目的】

阿蘇地域では観光とタイアップした地産地消でソバ栽培が取り組まれているが、近年の不良気象により収量は不安定である。そこで秋期栽培での不良気象による被害を回避するため夏ソバ栽培用品種「なつみ」を導入し、生産現場においても栽培が開始されている。しかし、「なつみ」における耕種基準が無く、安定した生産が求められるため、播種期、施肥量について検討した。

【材料および方法】

試験は阿蘇市高原農業研究所内ほ場（畑：淡色多湿黒ボク土）で行った。2006年は5月15日、29日、6月5日に、2007年は5月21日、27日、6月1日に、2008年は5月9日、15日、20日、26日に播種を行い、窒素施肥量は2006年は0.2、0.4kg/a、2007年は0.2、0.4、0.6kg/a、2008年は0.2、0.4、0.6、0.8kg/aとした。播種様式は、条播で条間は50cm、播種量は0.6kg/aとし、開花期に中耕培土を1回行った。

【結果および考察】

5月中旬に播種を行った2006年、2008年は、開花期および成熟期が少雨傾向であり、生育も旺盛で高い収量がみられた（図1）。しかし、5月中旬播種の場合、成熟期は梅雨末期となり（図2）、穂発芽や収穫作業遅延に起因する収量および品質の低下が懸念されることから、収穫は梅雨明け後に行うことが望ましいと考えられた。「なつみ」栽培においては梅雨明け後に成熟期となる作型の場合、播種期は5月下旬であった（図2）。5月下旬の播種においては、窒素施肥量の増加に伴い増収傾向がみられ（図3）、0.6～0.8kg/aが望ましいと考えられた。また、増肥による倒伏はみられなかった。収量向上の要因は、開花数の増加、結実率の向上によるものであった（表1）。開花最盛期におけるLAI（葉面積指数）と収量には密接な関係がみられ、生産現場で目標となる10kg/a程度の収量を確保するためのLAIは1.4程度が必要と推測された（図4）。

以上の結果から、阿蘇地域における「なつみ」の栽培においては、収量・品質の安定を考慮すると播種適期は5月下旬、窒素施肥量は0.6～0.8kg/aでLAIが増大し、開花数が増加することから収量向上に有効であると考えられた。

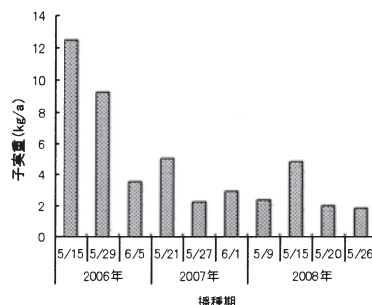


図1 播種期と子実重

注1) 窒素施肥量は0.2kg/a
注2) 2006年、2008年の5/15播種については開花期・成熟期が少雨傾向であった

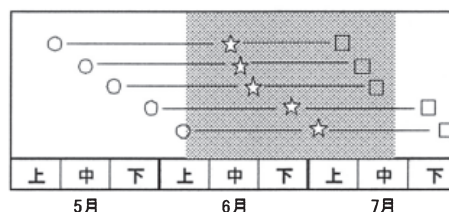


図2 播種期別の生育ステージ

注1) ○播種期、☆開花期、□成熟期
注2) 梅雨入りの平年値は6月5日、梅雨明けは7月18日
注3) 黒差りは梅雨期間を示す

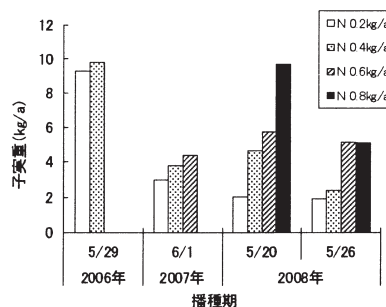


図3 播種期・施肥量と子実重

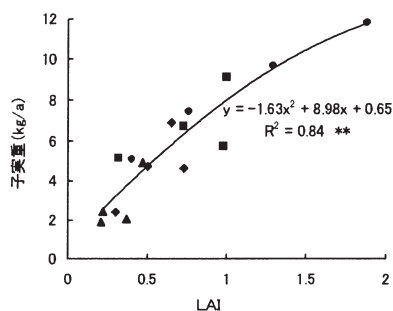


図4 LAIと子実重との関係（2008年）

注) ▲: 窒素施肥量0.2kg/a、◆: 0.4kg/a、■: 0.6kg/a、●: 0.8kg/a

表1 収量関連形質

窒素施肥量 (kg/a)	穂実粒数 (/個体)	開花数 (/個体)	結実率 (%)	子実重 (kg/a)
0.2	14.9 c	116 c	11.7 a	2.8 c
0.4	17.3 bc	142 bc	11.9 a	4.7 b
0.6	22.2 ab	171 ab	12.5 a	6.7 a
0.8	26.4 a	189 a	14.2 a	8.5 a

注1) 結実率=穂実粒数/開花数(穂実粒数+しんい数+未実粒数)×100

注2) 試験年は2008年、播種期は5/9、5/15、5/20、5/26を平均した

注3) 同一アルファベット間には5%水準の有意差無し